

メディアリテラシー関連教材(小学校国語科)の内容分析

大野木 裕 明

Ⅰ はじめに

この論文の目的は、2002年（平成14年）から全面実施されている小学校「国語」の教科書の内容をメディアリテラシーの観点から内容分析することにある。そのために、調査1として従来のメディアリテラシーに関する有力な定義の吟味・整理をし、それを踏まえた上で、調査2として教科書分析に着手する。

ここで、数あるメディアリテラシーの諸問題のうち、特に「教科書」「国語科」として焦点化した理由に触れておく。第1に、なぜ学校教育分野の教科書におけるメディアリテラシー関連教材を扱うのかという点について述べる。最近、雑誌『視聴覚教育』(2002年6月号、p.12)紙上にブックレビューとして、以下のような記事が掲載された。「本書におけるメディア・リテラシーの概念は広く、一般的な使われ方とはやや異なっているように思われる。たとえば、用語の中に、リサーチ・リテラシーという語がある。社会調査を読む力ということのようだ。確かに読解能力、活用能力という一般用語としてリテラシーという語が使われることからすればそれでよいとも言える。しかし、メディア・リテラシーは、もう少し限定的に使われる語ではなかったかという疑問が私にはある。……（平沢茂）」。

書評氏のこのような主張に従うと、例えば子どもたちがインターネットで検索したり「地域の人々」にインタビューした「調べ学習」「総合的な学習の時間」の成果発表の力は、メディアリテラシーとは独立のものということになる。これでは学校教育のフィールドで現実に行われているメディアリテラシー育成の機会を、みすみす看過してしまうことになってしまう。村野井・三嶋・乾・大野木（1999）、田代・宇野・村野井・大野木（2002）などでまとめた具体的な授業実践事例をみると、むしろ「調べ学習」などで学習成果の発信をする機会が保証された現在、展開あるいは必要とされているメディアリテラシーは、大きく広がっている可能性があるというのが実感である。そして、その証拠は学校教育の中に見出されているのではないかとするのがこの小論の考え方である。

第2点に、なぜ国語科に着目するのかという理由について述べる。これは第1点の具体的作業を、どの教科で始めるかということと関わっている。全教科がメディアリテラシーと関連してい

るという可能性を否定しているわけではない。国語科に着目する理由は、先進的なメディアリテラシー実践で知られるカナダ・オンタリオ州教育省(編)の教師用指導書『メディアリテラシー』の中で、「国語の教師は、メディア・リテラシーを学校教育へ導入するうえで最も熱心に取り組んできた。国語の授業にはメディア・スタディーズで重要な要素が含まれている。すなわち、美学、言語、ジャンル研究、テキストのクリティカル分析などの要素である。国語教師は映画と文学の比較、映画やテレビの批評、広告や脚本で使われている言語の研究などの学習活動を通じて、メディア問題を国語の授業と結びつけてきた。(以下略)」(訳書、p.21)と述べられているからである。また日本でも、国語科に関連するメディアリテラシーの実践事例書が刊行されたからである(由井はるみ編『国語科でできるメディアリテラシー学習』明治図書出版、井上尚美・中村敦雄編『メディア・リテラシーを育てる国語の授業』明治図書出版)、『教育科学 国語教育—メディア・リテラシーの授業開発—』(No.616))。以上が小学校国語科の教科書という1つの公的な教育的資料の中にメディアリテラシー関連教材が含まれているかどうかを確認することの理由である。

この作業の結果、もしもメディアリテラシー関連教材が国語科教科書の中に見出されるならば、それは学校教育において「実質的に」メディアリテラシーを扱っていることの新しい証拠となるだろう。この小論は、その証拠を列挙する作業結果の報告である。

なお、「実質的に」とする意味は、学習指導要領(国語科)や文部科学省教科調査官によるいくつかの解説書(小森茂『小学校新国語授業の基本用語辞典』、小森茂・井上一郎『小学校国語科 基礎・基本と学習指導の実践』、河野庸介・金子守『改訂中学校学習指導要領の展開 国語科編』、河野庸介『中学校新国語科授業の基本用語辞典』など)には、メディアリテラシー、クリティカル思考の用語が見出されないためである。また、先に挙げた、由井はるみ編『国語科でできるメディアリテラシー学習』、井上尚美・中村敦雄編『メディア・リテラシーを育てる国語の授業』、『教育科学 国語教育—メディア・リテラシーの授業開発—』でも、かならずしも教科書の単元と直接に結びつけられた実践が見られない現状だからである。実際、由井(編)では、実践1から実践9まで収められているが、そのうちのいくつかは授業実践ではなく構想であり、残りの具体的な授業実践も高校生対象である。井上・中村(編)では、小学校について3つの授業実践が収められているが、それらは「パソコンでカルタづくり(小1)」「CMづくり(小4)」「卒業記念映画制作(小6)」である。教科書の具体的な単元・箇所との対応づけよりもむしろ、発展的な扱いのようである。『教育科学 国語教育—メディア・リテラシーの授業開発—』では小学校におけるメディア・リテラシーの授業開発事例が10本収められているが、そのうち教科書(旧版)の単元との具体的な関連づけに言及しているのは草野剛実践と相原貴史実践の2本のみである。またメディア特性についても新聞や映画制作がいくつか扱われているが、テレビや新聞そのもののメディア特性には焦点化されていない。

Ⅱ 調査1：メディアリテラシーに関する有力な諸定義

これまでによく引用される定義のいくつかについて抽出し以下に列挙した。

-
- (1) カナダの市民組織「メディア・リテラシー協会 AML」による定義（鈴木1997の紹介による Pp.6-7）なお、AML(Association for Media Literacy)は、1978年にカナダオンタリオ州で結成された教員、親、市民、メディア専門家等の市民組織。

「メディア・リテラシーとは、メディアはどのように機能するか、メディアはどのように意味を作りだすか、メディアの企業や産業はどのように組織されているか、メディアは現実をどのように構成するかなどについて、理解と学ぶ楽しみを促進する目的で行う教育的な取り組みである。メディア・リテラシーの目標には、市民が自らメディアを創りだす力の獲得も含まれる。」

- (2) メディア・リテラシー運動全米指導者会議による定義（鈴木1997の紹介による p.7）

「メディア・リテラシーとは、市民がメディアにアクセスし、分析し、評価し、多様な形態でコミュニケーションを創りだす能力を指す。この力には、文字を中心に考える従来のリテラシー概念を超えて、映像および電子形態のコミュニケーションを理解し、創りだす力も含まれる。」（1992年、アスペン・インスティテュート）

- (3) 鈴木みどり（1997）による定義

「メディア・リテラシーとは、市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創りだす力を指す。また、そのような力の獲得をめざす取り組みもメディア・リテラシーという。」(p.8)

- (4) 鈴木みどり（2001）による定義

「メディア教育：メディアについて学び教えること。その取り組みは、国や地域によって、メディア・リテラシー、メディア教育、メディア・スタディーズ、と呼び方は異なる。しかし、メディア教育という場合も、メディアを教材として使って行う教育（従来の視聴覚教育）ではなく、本書でいう「メディア・リテラシー」と同義で、メディアについてクリティカルに学び、教えることを指している。また、その目的が、社会の民主主義的構造の強化とメディア社会を生きる人間の基本的権利（人権）に深く関わる取り組みであるという理解も世界では共有されている。なお、本書では、混乱を避けるために、「メディア教育」を使わず、「メディア・リテラシー」の語で統一している。」(p.262)

「クリティカル：批判的と訳して使うこともある。メディアの意味、歪み、価値観について社会的文脈で深く考え、多面的に吟味し読み解いていこうとする視点、立場をいう。」(p.257)

(5) 放送分野における青少年とメディア・リテラシーに関する調査研究会報告書 2000年6月
(郵政省) 鈴木 (2001) による紹介

①メディアを主体的に読み解く能力。

ア 情報を伝達するメディアそれぞれの特性を理解する能力。

イ メディアから発信される情報について、社会的文脈で批判的に分析・評価・吟味し、能動的に選択する能力。

②メディアにアクセスし、活用する能力。

③メディアを通じてコミュニケーションを創造する能力。とくに、情報の読み手との相互作用的コミュニケーション能力。

(6) 渡辺武達 (1997) による定義

「メディアを使いこなす、その提供情報を読み解く能力」(p.96)

(7) 事典『メディア用語を学ぶ人のために』による定義

「メディアのあり方を社会構造のなかにおいて理解し、メディアの提供する情報を正しく読み解き、メディアを使いこなす人びとの能力のこと。…中略…。メディア・リテラシーとは、その第一義をメディアの提供する情報を市民主権主義の立場から読み解くことにおき、メディアを有効に使い、社会的プラス価値のある情報を発信するとともに、国家・自治体・共同事業体・企業などのメディア政策の立案と実行に参加することを目的とする能力のことである。そしてそういう立場からの訓練を<メディア・トレーニング>、そうした教育全体を<メディア教育>とよぶことができる。」(渡辺・山口, 1999 Pp.99-100)(なお、同書には、「批判的思考」「クリティカル・シンキング」の項はない)

(8) 水越伸 (1998) による定義

「以下の3つの次元の能力からなる。この3つは、バラバラなものではなく、相互に補完的で複合的な関係にある。①ビデオカメラの撮り方がわかったり、ワープロが使えたりするというメディア使用能力のこと。②テレビ番組や新聞記事を、送り手の言うとおりに鵜呑みにはせず、批判的に読み解いていくという意味のメディア受容能力のこと。③メディアを用いて自分自身やグループの意見を発表したり、議論の場をコーディネートできるという意味のメディア表現能力。」(p.53)

(9) 菅谷明子 (2000) による定義

「メディアが形作る「現実」を批判的(クリティカル)に読み取るとともに、メディアを使っ

て表現していく能力のことである。](vページ)

(10) トロント市教育委員会(1998)による定義

「メディア・リテラシーのある人とは、マスメディアの技術や影響について十分な情報を備え、メディアを批判的に理解できる人たちです。それと同時にさまざまな目的のためにメディア・テクストを構成する能力をもった人のことです。

メディア・リテラシーのキー・コンセプトとスキルは、二つの重要な活動、すなわちメディア・テクストを理解することと制作することの両者をバランスよく行うことを通して効果的に獲得されます。」(訳書、Pp.35-36)

(11) 市川克美(1999)による定義

「人間がテレビや新聞、インターネットなどのメディアによって情報を批判的に読み取ったり、創造的に表現するための複合的な能力のことです。メディアと言ってもいろいろあります。テレビ、ラジオ、新聞などのマス・メディア、電話、携帯電話、パソコン通信などのパーソナルなメディア、そしてカラオケやテレビゲームなど日常生活の一部に入り込んできているメディアなどさまざまです。」(p.30)

「以下の①②③④の多層性を持った概念。①メディアの特性理解に基づき、メディア・メッセージを批判的に受容した上で、②メッセージを創造的に解釈し、③適切なメディアの利用法を見つけた上で、④メディアを通じて自ら創造的なメッセージを発信する能力」(p.31)

以上を検討すると、相互に強調点の違いのみられる定義もあるが、しかしながら、対立・背反的な定義はほとんどみられない。そこで、あえて共通部分をまとめるとするならば、次のようになるだろう。1)メディアと関係がある、2)メディアの発信と関係がある、3)メディアの内容と関係がある、4)メディアの受信・受容と関係がある、5)メディアの特性(別の言い方をすると「メディア特有の癖」と関係がある、6)クリティカルな受信・受容と関係がある。

なお、ここで、クリティカル(critical)あるいはクリティカル思考(critical thinking)とは何かということであるが、カナダ・オンタリオ州教育省(1989)はクリティカル思考のポイントとして以下の8つをあげている。これらは、メディアによる送り手ではなく受け手(audience オーディエンス)側からとらえている点に留意されたい。

- ・証明可能な事実と価値観による主張との違いを区別できる。
- ・主張や情報源の信頼性を判断できる。
- ・申し立ての正確さを判断できる。
- ・根拠のある主張と根拠のない主張とを区別できる。
- ・偏見を見つけることができる。

- ・明言された仮定とそうでないものを確認できる。
- ・論理的矛盾を認めることができる。
- ・議論の強さの程度を判断できる。

また、メディアとは何かであるが、メディアはOHP、テレビ、ビデオ、パソコンだけではなく、従来のプリント紙（印刷物）をも含んでいる。したがって、新聞や教科書もまた、メディアリテラシーの対象ということになる。メディアリテラシーとは、「メディア」を強調したリテラシー概念といえよう。

III 学校教育とメディアリテラシー

上記の整理作業を踏まえて、学校教育におけるメディアリテラシーとは何かを考えていく。

まず、メディアリテラシーの研究の系譜であるが、日本でメディアリテラシーという語について本格的に論じたものとしては坂元（1986）の論考が知られている。しかし、内容的にみると、もう少し以前にさかのぼることができる。その時期がいつ頃かについては諸説あるが、例えば高桑（1999）は、学校における周辺の事情を次のように3つに分けてまとめている（Pp. 216—218）。

- 1) 独立教科 成城学園初等学校が、戦前からの映画教育の実践をもとに、戦後「映像化」（「映像の時間」、初めは「映画の時間」と呼んだ）を特設して指導した。イギリスでは、「メディアア科 media studies」が1980年代から試みられてきた。
- 2) 既存の単数または複数の教科の一部 水越敏行、吉田貞介らによる映像視聴能力の指導。これは、国語科の指導内容に準じて放送番組の視聴能力を体系化したもので、小学校のカリキュラム作成である（吉田, 1985）。
- 3) 教科外の活動 1920年代～1930年代の映画教育であり、日本では、「児童映画日」「講堂映画会」などとして現れた。

これらのうちの一部は、今日でいうメディアリテラシーとは区別されるかもしれない。しかし、これらはメディアに関する2つの大きな流れ、1) ビデオやパソコンを補助的道具として利用して教科教育を促進することと、2) メディアそのものの学習・教育の2つのうち、後者の2) すなわちメディアリテラシーを重視していたことは明らかだろう。これらを経て1980年代に至り、東京工業大学の坂元昂教授の研究グループ、金沢大学教育実践研究指導センターの吉田貞介教授の研究グループらが萌芽的研究として取り組みを始めた。

さて、国語科の内容分析であるが、本稿では、以下のような手順を踏んだ。煩雑なので、ここに書き留めておく。

まず、学習指導要領や教科書内容の関連書にメディアリテラシーの用語が出ていない以上、それが実質的にメディアリテラシーと関連するのかが明らかではない。そこで、まず、小学校教科書のうち任意の一社（A社＝光村図書版）を例として、小学校学習指導要領国語科の記述とメデ

メディアリテラシーの定義とを照合し、教科書のどの部分がメディアリテラシーに関連するかの探索的な見極め作業をおこなった。これを以下の「IV 調査2-1 小学校国語科A社版の検討」としてまとめた。

次には出版社間の記述の異同状況を見るために、合計6社について比較対照をおこなった。これを、以下の「V 調査2-2 小学校国語科にあらわれたメディアリテラシー関連教材の検討」としてまとめた。最後に、「VI 総括」として、以上の教科書分析の総括と若干の展望をおこなった。

IV 調査2-1 小学校国語科A社版の検討

煩雑さを避けるための便宜として次のようにまとめた。

- 1 低学年
 - (1) 学習指導要領におけるメディアリテラシー関連部分
 - (2) 教科書(A社版)の該当箇所
- 2 中学年
 - (1) 学習指導要領におけるメディアリテラシー関連部分
 - (2) 教科書(A社版)の該当箇所
- 3 高学年
 - (1) 学習指導要領におけるメディアリテラシー関連部分
 - (2) 教科書(A社版)の該当箇所
- 4 まとめ

1 小学校1、2年生「国語科」にみられるメディアリテラシー関連教材

(1) 学習指導要領(小学校第1、2学年)におけるメディアリテラシー関連部分

2002年度度(平成14年度)完全実施の改訂小学校学習指導要領のうちで、特に国語科に該当する記述は、「第2章各教科 第1節国語」に見られる。それについて、メディアリテラシーに関連すると考えられる部分を論理的に抽出した。結果であるが、プリント紙もメディアに含めるので、結局ほとんどの部分がメディアリテラシーと関連するとみなされた(表1)。これは、記述だけでは判断が困難な箇所もあるので、さしあたって広く解釈したためである。なお、最初の「第1 目標」は小学校全学年にあたるが、重複をさけるために、初出のみ記載する。

表1 メディアリテラシーと関連する小学校学習指導要領国語科(第1学年及び第2学年)

第1 目標

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

第2 各学年の目標及び内容

[第1学年及び第2学年]

1 目標

- (1) 相手に応じ、経験した事などについて、事柄の順序を考えながら話すことや大事な事を落とさないように聞くことができるようにするとともに、話し合おうとする態度を育てる。
- (2) 経験した事や想像した事などについて、順序が分かるように、語や文の続き方に注意して文や文章を書くことができるようにするとともに、楽しんで表現しようとする態度を育てる。
- (3) 書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付きながら読むことができるようにするとともに、楽しんで読書しようとする態度を育てる。

2 内容

A 話すこと・聞くこと

- (1) 話すこと・聞くことを育てるため、次の事項について指導する。
 - ア 知らせたい事を選び、事柄の順序を考えながら、相手に分かるように話すこと。
 - イ 大事な事を落とさないようにしながら、興味をもって聞くこと。
 - ウ 身近な事柄について、話題に沿って、話し合うこと。

B 書くこと

- (1) 書くことの能力を育てるため、次の事柄について指導する。
 - ア 相手や目的を考えながら、書くこと。
 - イ 書こうとする題材に必要な事柄を集めること。
 - ウ 自分の考えが明確になるように、簡単な組み立てを考えること。
 - エ 事柄の順序を考えながら、語と語や文と文との続き方に注意して書くこと。
 - オ 文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いなどに注意すること。

C 読むこと

- (1) 読むことの能力を育てるため、次の事項について指導する。
 - ア 易しい読み物に興味をもち、読むこと。
 - イ 時間的な順序、事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと。
 - ウ 場面の様子などについて、想像を広げながら読むこと。
 - エ 語や文としてのまとまりや内容、驚きなどについて考えながら声に出して読むこと。

[言語事項]

- (1) 「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。
 - ア 発音・発声に関する事項
 - (ア) 姿勢、口形などに注意して、はっきりした発音で話すこと。

以下、略する。

3 内容の取り扱い

- (1) 内容の「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」に示す事項の指導は、例えば次のよ

うな言語活動を通して指導するものとする。

「A話すこと・聞くこと」

尋ねたり応答したりすること、自分が体験した事などについて話すること、友達の話を聞くこと、読んだ本の中で興味をもったところなどを紹介することなど

「B書くこと」

絵に言葉を入れること、伝えたい事を簡単な手紙などに書くこと、先生や身近な人などに尋ねた事をまとめること、観察した事を文などに表すことなど

「C読むこと」

昔話や童話などの読み聞かせを聞くこと、絵や写真などを見て想像を膨らませながら読むこと、自分の読みたい本を探して読むことなど

- (2) 第1学年において2の内容を指導するに当たっては、入門期であることを考慮し、当該学年にふさわしい指導を行うこと。その際、(1)の言語活動のうち、尋ねたり応答したりすること、絵に言葉を入れること、昔話や童話などの読み聞かせを聞くこと、絵や写真などを見て想像を膨らませながら読むことなどを主として取り上げるよう配慮すること。

(2) 教科書(A社版)の該当箇所(第1学年及び第2学年)

以下、メディアリテラシーに関わると判断される箇所を抽出していく。その際には、メディアリテラシーを狭くとらえて排除するのではなく、扱うことのできる可能性を探って広くとらえていくことにしたので、具体的にはメディアとしてプリント紙も含めた。また、リテラシーとして文字の読み書きと、文字以外のリテラシー的表現の区別にも留意していくことにした。指導要領と該当箇所との対照は、なるべく主たる1領域について指摘し、さらに紙幅節約のため言語事項との関わりは基本的には言及を略した。

なお、分析の対象としたA社版とは、福井県で使用している光村図書版をさす。

表2 『こくご 一年(上) かざぐるま』(光村図書)の分析

- p.1「あそびにきてね」：イヌが、ウサギの描いた自宅地図のポスターを見ている。地図を見てウサギの家を訪問する。

メディア ポスター

領域 C読むこと(1) イウ(ただし、まだ文字は含まれていない)

- p.8「おはなし よんで」：おとなが子どもたちに『うらしまろう』の絵本を読みきかせている。

メディア 絵本

領域 C読むこと(1) アイウ

- p.10「どうぞ よろしく」：男児と女児が自分の書いた名刺を交換している。

メディア 紙

領域 B書くこと(1)アイウ、C読むこと(1)アイ

- p.16「たんけんしたよ、みつけたよ」：子どもがほけんしつの人に何をする部屋かを質問し、学級へ戻って調査報告をしている。

メディア 紙

領域 A話すこと・聞くこと(1)アイ

- p.38「だれだか わかるかな」：ちょうちょ、とんぼ、かぶとむしについて、一部分の写真と全体の写真(映像の切り取り)があり、それが何かを想像させる。

メディア 写真

領域 C読むこと(1)ウ

- p.48「おもちゃと おもちゃ」：玩具屋と餅屋の絵を用いて、「おもちゃ」と「おもちゃ」の区別をする。

メディア 絵(+文字)(プリント)

領域 C読むこと(1)ウエ

- p.58「こんな ほんを みつけたよ」：学級文庫で昆虫の本を見つけたので一緒に読もう。

メディア 本

領域 C読むこと(1)ア

- p.62「てがみを かこう」 先生あるいは友だちへ向けた手紙や絵日記を書こう。

メディア 手紙(絵と文字)

領域 B書くこと(1)アイウ

- p.80「わたしは、なんでしょう」：紙に絵と問題を書いてなぞなぞ遊びをしよう。

メディア 紙

領域 A話すこと・聞くこと(1)アイであるが、B書くこと(1)イウ+C読むこと(1)アの作業を含む

- p.84「じどう車くらべ」：自動車を選んで絵と説明文を書き集めて図鑑を作ろう(p.89)。

メディア プリント紙+絵

領域 C読むこと(1)ウエ+B書くこと(1)アイウエ

表4 『こくご 二年(上) たんぼぼ』(光村図書)の分析

- p.4「ふきのとう」：野原や講演で春を見つけて、その様子を発表しよう。

メディア なし

領域 A話すこと・聞くこと(1)ア

- p.16「今週のニュース」(しらせたい ことを見つけて かこう)：知らせたいことをカード

に書いて、班ごとに集めて大きな紙に貼って壁新聞を作ろう。

メディア 壁新聞

領域 B書くこと(1) イウ

p.20「たんぽぽのちえ」：たんぽぽの智恵を説明した本を作ろう。

メディア 本

領域 B書くこと(1) イウ

p.32「お手紙こうかん会」：聞きたいことを手紙に書いて渡し、返事を書いてもらおう。

メディア 手紙

領域 C読むこと(1) イ+B書くこと(1) アウ

p.44「スイミー」：スイミーの話を絵に描いたりして紹介しよう。

メディア ポスター

領域 A話すこと・聞くこと(1) ア+B書くこと(1) アイウエ

：図書館で本を探して読んで紹介のポスターなどを作ろう。

p.61「生きものかんさつカード」(よく見て書こう)：かんさつカードを作ろう。

メディア かんさつカード

領域 B書くこと(1) イオ

p.66「あったらいいな、こんなもの」：あったらいいなと思うものを発表しよう。

メディア 絵など

領域 A話すこと・聞くこと(1) ア

p.74「サンゴの海の生きものたち」：海の生きものになって発表したり、関わり合っている相手にお礼のカードを書こう。

メディア カード

領域 A話すこと・聞くこと(1) ア+B書くこと(1) アイ

2 小学校3、4年生「国語科」にみられるメディアリテラシー関連教材

(1) 学習指導要領(小学校第3、4学年)におけるメディアリテラシー関連部分

同様に、小学校第3学年と第4学年の教科書についてみていく。メディアリテラシーに関わると考えられる内容は表5のようになった。

表5 メディアリテラシーと関連する小学校学習指導要領国語科(第3学年及び第4学年)

1 目標

(1) 相手や目的に応じ、調べた事などについて、筋道を立てて話すことや話の中心に気を付けて聞くことがで

きるようにするとともに、進んで話し合おうとする態度を育てる。

- (2) 相手や目的に応じ、調べた事などが伝わるように、段落相互の関係などを工夫して文章を書くことができるようにするとともに、適切に表現しようとする態度を育てる。
- (3) 目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読むことができるようにするとともに、幅広く読書しようとする態度を育てる。

2 内容

A 話すこと・聞くこと

- (1) 話すこと・聞くことの能力を育てるため、次の事項について指導する。

ア 知らせたい事を選び、自分の考えが分かるように筋道を立てて、相手や目的に応じた適切な言葉遣いで話すこと。

イ 話の中心に気を付けて聞き、自分の感想をまとめること。

ウ 互いの考えの相違点や共通点を考えながら、進んで話し合うこと。

B 書くこと

- (1) 書くことの能力を育てるため、次の事柄について指導する。

ア 相手や目的に応じて、適切に書くこと。

イ 書く必要のある事柄を収集したり選択したりすること。

ウ 自分の考えが明確になるように、段落相互の関係を考えること。

エ 書こうとする事の中心を明確にしながら、段落と段落との続き方に注意して書くこと。

オ 文章のよいところを見付けたり、間違いなどを正したりすること。

C 読むこと

- (1) 読むことの能力を育てるため、次の事項について指導する。

ア いろいろな読み物に興味をもち、読むこと。

イ 目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え、文章を正しく読むこと。

ウ 場面の移り変わりや情景を、叙述を基に想像しながら読むこと。

エ 読み取った内容について自分の考えをまとめ、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。

オ 目的に応じて内容を大きくまとめたり、必要なところは細かい点に注意したりしながら文章を読むこと。

カ 書かれている内容の中心や場面の様子がよくわかるように声に出して読むこと。

〔言語事項〕

- (1) 「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

ア 発音・発声に関する事項

- (ア) その場の状況や目的に応じた音量や速さで話すこと。

以下、略する。

3 内容の取り扱い

- (1) 内容の「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」に示す事項の指導は、例えば次のような言語活動を通して指導するものとする。

「A話すこと・聞くこと」

身近な話題についてスピーチをすること、要点などをメモに取りながら聞くこと、身近な出来事や調べた事柄について説明したり報告したりすること。

「B書くこと」

手紙を書くこと、自分の疑問の思った事などについて調べてまとめること、経験した事を記録文や学級新聞などに表すことなど。

「C読むこと」

読んだ内容などに関連した他の文章を読むこと、疑問に思った事などについて関係のある図書資料を探して読むことなど。

(2) 教科書（A社版）の該当箇所（第3学年及び第4学年）

以下、同様にして、メディアリテラシーに関わると判断される箇所を抽出していく。

表6 『こくご 三年（上）わかば』（光村図書）の分析

p.24「しょうたいじょうを作ろう」：家の人や地域の人などを学校行事に招待するために招待状を作ろう。

メディア 葉書または手紙

領域 B書くこと（1）アイエ

p.38「知っている場所を教えます」：教室や廊下にく教えてください・教えます>コーナーを作って、カードを作成して貼ろう。

メディア カード、写真

領域 B書くこと（1）エ

p.61「本のさがし方」：図書室の本の分類の仕方や探し方。

p.64「本のおびを作ろう」：本の帯を作ろう。

メディア 本の帯

領域 B書くこと（1）アイ

p.70「みんな、子どもだった」：いろいろな写真を見て気づきを話し合い、調べ学習をしよう。

「インタビューをしよう」として、「テープにろく音してもいいか、きいてみよう」(p.73)

メディア 本、写真、テレコ

領域 A話すこと・聞くこと（1）イエ、インタビューの仕方、発表（スピーチ）の仕方のマニュアルが解説されている。

表7 『国語 四年（上）かがやき』（光村図書）の分析

p.18「こんなこと、したいな」：誕生日に「言葉の贈り物」をしよう。季節の話題、身近な人の出来事などをニュースにして話そう。

メディア 紙

領域 B書くこと(1)ア

p.22「お元気ですか」：手紙の書き方。

メディア 手紙

領域 B書くこと(1)ア

p.28「ツバメがすむ町」：ツバメについてのフィールドワークの概説。調査用紙を作ろう。

メディア なし

領域 B書くこと(1)イ

p.40「新聞記者になろう」：新聞の内容を調べよう。新聞を作ろう。

メディア 新聞

領域 C読むこと(1)イオ、B書くこと(1)イウエ

p.61「本のさがし方」：図書室の紹介。目録やコンピュータの利用について。本の検索で、コンピュータが役立つ。

メディア 本、コンピュータ

領域 なし

p.64「ポスターをかくて、作品をしょうかいしよう」：読んだ本の紹介をするためにポスターを作ろう。

メディア 本、ポスター

領域 C読むこと(1)ア、C書くこと(1)オ

4 小学校5、6年生国語科にみられるメディアリテラシー関連事項

(1) 学習指導要領におけるメディアリテラシー関連部分

以下、同様にして、小学校第5学年と第6学年の教科書についてみていく。メディアリテラシーに関わると考えられる内容は表8のようになった。

表8 メディアリテラシーと関連する小学校学習指導要領国語科(第5学年及び第6学年)

1 目標

- (1) 目的や意図に応じ、考えた事や伝えたい事などを的確に話すことや相手の意図をつかみながら聞くことができるようにするとともに、計画的に話し合おうとする態度を育てる。
- (2) 目的や意図に応じ、考えた事などを筋道を立てて文章に書くことができるようにするとともに、効果的に表現しようとする態度を育てる。
- (3) 目的に応じ、内容や要旨を把握しながら読むことができるようにするとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。

2 内容

A 話すこと・聞くこと

(1) 話すこと・聞くことの能力を育てるため、次の事項について指導する。

ア 考えた事や自分の意図が分かるように話の組み立てを工夫しながら、目的や場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。

イ 話し手の意図を考えながら話の内容を聞くこと。

ウ 自分の立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと。

B 書くこと

(1) 書くことの能力を育てるため、次の事柄について指導する。

ア 目的や意図に応じて、自分の考えを効果的に書くこと。

イ 全体を見通して、書く必要のある事柄を整理すること。

ウ 自分の考えを明確に表現するため、文章全体の組立ての効果を考えること。

エ 事象と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。

オ 表現の効果などについて確かめたり工夫したりすること。

C 読むこと

(1) 読むことの能力を育てるため、次の事項について指導する。

ア 自分の考えを広めたり深めたりするために、必要な図書資料を選んで読むこと。

イ 目的や意図などに応じて、文章の内容を的確に押さえながら要旨をとらえること。

ウ 登場人物の心情や場面についての描写など、優れた叙述を味わいながら読むこと。

エ 書かれている内容について事象と感想、意見の関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読むこと。

オ 必要な情報を得るために、効果的な読み方を工夫すること。

〔言語事項〕

(1) 「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。
以下、略する。

3 内容の取り扱い

(1) 内容の「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」に示す事項の指導は、例えば次のような言語活動を通して指導するものとする。

「A話すこと・聞くこと」

自分の考えを資料を提示しながらスピーチをすること、目的意識をもって友達の考えを聞くこと、調べた事やまとめた事を話し合うことなど。

「B書くこと」

礼状や依頼状などの手紙を書くこと、自分の課題について調べてまとめた文章に表すこと、経験した事をまとめた記録や報告にすることなど。

「C読むこと」

読書発表会を行うこと、自分の課題を解決するために図鑑や事典などを活用して必要な情報を読むことなど。

(2) 教科書（A社版）の該当箇所（第5及び第6学年）

以下、同様にして、メディアリテラシーに関わると判断される箇所を抽出していく。

表9 『国語 五年(上) 銀河』(光村図書) の分析

p.4「新しいわたし」：新しいと感じる教科書の写真を選んで発表しよう。

メディア 写真

領域 A話すこと・聞くこと(1)ア

p.7「新しい友達」：登場人物の「ひろ」に対して手紙を書こう。

メディア 手紙

領域 B書くこと(1)アウ

p.26「こんなこと、したいな」：＜ニュースキャスターになろう＞＜記録を残そう＞など、見た
り聞いたり体験したりしたことをポスターやカードに書いて紹介しよう。好きな
作家や興味のあるテーマの本を読んで気に入った言葉を集めよう。

メディア 紙(カード、ポスター、本)

領域 A話すこと・聞くこと(1)ア、B書くこと(1)ア、C読むこと(1)
ウオ

p.32「依頼の手紙、お礼の手紙」：松川ケーブルテレビ局見学への依頼状を書こう。お礼状をこ
んな風にかこう。

メディア 手紙

領域 B書くこと(1)ウ

p.52「言葉の研究レポート」：身の回りの言葉や方言について意味と使い方をインターネットな
どを使って調べてレポートにしよう。調べ方のガイドライン、学習カードの活用、
レポートの構成。＜コンピュータでは、「例」と「礼」のまちがいなどがよくある
よ。＞(p.53)、インターネットの説明(p.55)。

メディア 方言辞典・国語事典の本(図書室)やインターネット

領域 A話すこと・聞くこと(1)イ、B書くこと(1)アイ、C読むこと
(1)イウ

p.95「本と出会う」：読みたい本の探し方として図書館のニュースやインターネット利用など
様々な情報を利用しよう。

メディア インターネット、図書館ニュース

領域 C読むこと(1)アイ

p.98「読書発表会を開こう」：読書内容をクラスみんなに知らせる読書発表会をしよう。

メディア 本

領域 C読むこと(1)アイ、A話すこと・聞くこと(1)ア

p.104「わたしたちの学校生活」：伝えたい体験をカードに書いて順序などを工夫しよう。

メディア カード

領域 A話すこと・聞くこと(1)ア、B書くこと(1)ウ

表10 『国語 六年(上) 創造』(光村図書)の分析

p.24「聞く」ということ」：鵜呑みにするのではなく、自分で考えながら聞こう。

メディア なし

領域 A話すこと・聞くこと(1)イ

p.26「こんなこと、したいな」：新聞記事・テレビ・本・パンフレットなどを見て、一分間スピーチをしよう。「記者の目」カードを利用しよう、人物事典を作成しよう。

メディア なし

領域 A話すこと・聞くこと(1)イ、B書くこと(1)エ、C読むこと(1)イ

p.28「問い合わせの手紙」：問い合わせの手紙をこんな風に書こう。

メディア 手紙、ファクシミリ、電子メール

領域 B書くこと(1)ア

p.38「砂漠に挑む」：読んでわかったことについて、「砂漠PR新聞」を作ろう。

メディア 新聞

領域 B書くこと(1)アオ

p.52「ガイドブックを作ろう」：

メディア 本、事典、インターネット

領域 B書くこと(1)イオ

p.97「作家と作品」展示コーナーを作ろう」：関心のある作家について、展示コーナーを作ろう。

メディア 展示物、ポスター、音声テープ

領域 B書くこと(1)オ

4 まとめ

以上のような作業の結果に基づき、大きくは3つのことを分析のまとめとしたい。

(1) これら小学校国語科教科書の教材からメディアリテラシー固有の教材を峻別することは、一部を除いて、かなり困難である。

見てきたように、教科書では、読む、書く、聞く、話すことの多くはプリント紙と鉛筆を併用して説明されていた。それらは、国語科教科書で言及されているメディアの大半がプリント紙(ポ

スター、文字、写真、絵日記、手紙)を想定しているためである。そのため、明らかに、「調査1のメディアリテラシーの諸定義」で扱ったメディアリテラシーとは独立のように見受けられた。しかし、もしも、それらの多くがプリント紙ではなく、テレビやパソコンの画面上だと仮定したらどうだろうか。その場合には、これらのほとんどがテレビに関するメディアリテラシー、パソコンに関するメディアリテラシーなどに関連するだろう。したがって、これら抽出箇所が、プリント紙からプリント紙以外へと拡張していく基礎・基本の部分であるとみなせば、これら抽出箇所のほぼすべてがメディアリテラシーを扱っていることになる。他方、これら抽出箇所がプリント紙というメディア特性(いわゆる「そのメディア特有の癖」)を強調したものではないとするならば、これら抽出箇所の大半はメディアリテラシーとは独立であることになる。

結果として、この分析作業を振り返ると、これら抽出箇所がそのいずれであるかの判断は難しかった。プリント紙がメディアリテラシーでいうメディアの1つであると強調した部分を発見することは困難であった。これが、ひとまずの概括的な結論である。

なお、テレビのニュースキャスター、放送局を扱った単元が見られたが、これらは明らかにプリント紙という書かれた文字よりも、音声言語と非言語的コミュニケーションを強調した扱いであり、まさしくメディアリテラシー関連教材となっている。先に「一部を除いて」としたのは、この部分である。

(2) クリティカル思考に関する箇所が含まれており、それらは実質的にメディアリテラシーと関わる。

一例をあげると、『こくご 一ねん(上) かざぐるま』(光村図書、Pp.38-43)の中には、「だれだか わかるかな」があり、ここではクリティカル思考が扱われていると解釈できよう。構成をもとに具体的に説明しよう。

p. 38 ページの上半分 何かの一部分だけの写真。

ページの下半分 文章「くろい くちが、くるくるとまるまっています。誰だかわかるかな。」

p. 39 ページの上半分 文章「これは、あげはちょうです。あげはちょうの くちは、ながくのびます。あげはちょうは、ながく のびした くちで、みつを すいます。」

p. 39 ページの下半分 前ページの部分写真の全体像、つまりアゲハチョウの全体写真。

これは、一種の「なぞなぞ」ゲームである。まず、意図的に、ある写真の一部分だけ(不十分な情報)を見せて、それが何かを想像させる(Q:質問の部分)。次のページでその写真の全体像をみせて(十分な情報)、種あかしをしている(A:答の部分)。以下、同様に、とんぼ、かぶとむしについてのQアンドAクイズになっている。

もちろん、教室の子どもたちは、何の動物かを当てることだけに集中するかもしれない。しかし、これは、全体の一部分だけを切り取った映像は情報の受け手の立場からは認知しにくく、誤解しやすいということと深く関わっている。このように、絵情報の特別な部分だけを切り取って提示すると、そうではなく全体像を情報提示したときと比べて、受け手の認知が異なってしまう場合がある。これは、受け手のクリティカル思考というメディアリテラシーの重要な部分の問題にほかならない。

同様に、これを送り手サイドの問題として扱ったのが、「わたしは、なんでしょう」(よくきいて、あてよう)(Pp.80-81)である。画用紙の半分に、当ててほしいものの絵を描く。残りの半分に問題を書く。「わたしは、きのようふくをきています。わたしは、じをかくのが大すきです。わたしは、なんでしょう。」この答は鉛筆であるが、これをメディアリテラシーとしてとらえ直すことが可能である。これは、言葉による情報に関して、送り手サイドと受け手サイドの経験をおこなうこと、つまりロール・プレイ(role playing)の演習をしていることになる。ここでは、送り手が全体のうちの限られた情報のみを提示した時に、受け手が正しく認知できるかどうかという能力が関与している。つまりクリティカル思考と関連する教材である。

(3) 新聞、テレビ(あるいは放送局)に関する箇所が含まれており、プリント紙以外の他メディアが扱われている。

例えば、『こくご 二年(上)たんぼぼ』(光村図書、Pp.16-17)の中には「今週のニュース(しらせたい ことを見つけて かこう)」がある。カードに書いて、班ごとに集めて大きな紙に貼って壁新聞を作る。これ自体は、国語科の範囲であることは確かであるが、発信先によっては壁新聞ではなく手紙の方が適切であるかどうかを後で扱うことを考えると、これはかなりメディアリテラシーの色合いが濃い。また、メディアそのものについても、インターネット、コンピュータ、VTRなどの用語が散見されている。

以上、(1)一部を除いて、メディアを強調するリテラシーを扱う単元や関連教材を見出すことはほとんど困難であったが、(2)クリティカル思考、および(3)他メディアを扱っている点において、実質的なメディアリテラシー関連教材が含まれていると結論できよう。

V 調査2-2 小学校国語科にあらわれたメディアリテラシー関連教材の検討

以上のまとめに沿って、今度は他の小学校国語科の教科書について内容分析を続けることにした。以下、他の教科書においても(1)メディアを強調するリテラシー関連箇所、(2)メディアと関係づけたクリティカル思考を扱っている箇所、(3)プリント紙以外の他メディアを扱っている箇所、あるいはこれらを間接的に強く暗示させる箇所に絞って一覧表を作成した。

扱った国語科教科書は先に検討したA社版(光村図書)を含み6社、学年は1～6学年の合計6社36冊である(光村図書、東京書籍、学校図書、日本書籍、教育出版、大阪書籍)。リストは

本稿末尾に記した。

抽出箇所には、内容を表す暫定的な見出しを付けた。(2)は「☆クリティカル思考」あるいは「☆メディアリテラシー」などとした。クリティカル思考はメディアリテラシーの文脈でとらえているが、単独でクリティカル思考そのものについて扱ってある箇所は「☆クリティカル思考」としておいた。「☆メディアリテラシー」の大部分は、情報の送り手(プレゼンテーション)あるいは受け手(取材、調べ学習)としてクリティカル思考を含む。送り手と受け手の両方を扱っていることが自明の場合には併記しておいた。(3)は「★他メディア」などとした。これは、ビデオレター、インターネットなど、プリント紙以外の他メディアに関する言及箇所である。新聞などはプリント紙ではあるが、教科書以外であり、取材やプレゼンテーションと連動した扱いがほとんどなので、ここに含めてある。記載内容だけでは、該当するかどうか明確に判別しにくいものもあったが、それらはひとまず抽出しておいた。

『こくご 一年(上) かざぐるま』(光村図書)

☆受け手のクリティカル思考

Pp.38-41「だれだか わかるかな」：ちょうちょ、とんぼ、かぶとむしについて、一部分の写真情報を見せ、「なぜなぜ」クイズによって全体像を推測させる。

☆送り手と受け手のクリティカル思考

p.80「わたしは、なんでしょう」：言葉で「なぜなぜ」クイズをして、正解は絵で示す。

『こくご 二年(上) たんぼぼ』(光村図書)

★他メディア(壁新聞)

p.16「今週のニュース」(しらせたい ことを 見つけて かこう)：大きな紙で壁新聞を作ろう。

☆送り手と受け手のクリティカル思考

p.20「たんぼぼのちえ」：たんぼぼのちえを説明した本を作ろう。「書いてみよう」として次のように述べている。「学校や いえの ちかくで、たんぼぼを 見つけたら、どんなようすか 書きましょう。そして、きょうかしよに 書いて ある ことと くらべて みましょう。」(p.27)。

これにより、情報の送り手の体験をすることだけでなく、自分の書いたものと教科書の記述とを比較する事によって、正しいメディアとしての教科書を理解させたり、送り手の情報のウラをとったりすることを意識させることができるのだろう。

『こくご 三年(上) わかば』(光村図書)

★他メディア(テープレコーダ)／☆倫理性(取材の時)

p.73「インタビューをしよう」：「テープにろく音してもいいか、きいてみようよ」と、インタビューの仕方とテープレコーダの利用のしかたが例示されている。

『国語 四年（上）かがやき』（光村図書）

★他メディア（新聞）／☆送り手（新聞）のクリティカル思考

Pp.40-45「新聞記者になろう」：新聞の内容を調べよう。新聞を作ろう。

★他メディア（コンピュータ）

p.61「本のさがし方」：情報データベースとしての図書室の紹介。目録やコンピュータを利用すると本の検索ができる。

『国語 五年（上）銀河』（光村図書）

★他メディア（ニュースキャスター）／☆送り手のメディアリテラシー（プレゼンテーション）

Pp.26-27「こんなこと、したいな」：＜ニュースキャスターになろう＞テレビを想定してニュースキャスターのロール・プレイ演習。

☆受け手のクリティカル思考

Pp.52-59「言葉の研究レポート」：「コンピュータでは、『例』と『礼』のまちがいなどがよくあるよ。」(p.53)

★他メディア（インターネット）

Pp.52-59「言葉の研究レポート」：p.55に、インターネットの説明あり。「インターネット世界じゅうのコンピュータを回線で結び伝えたいことをやり取りする仕組み。」

★他メディア（インターネット）

p.95「本と出会おう」：読みたい本の探し方として図書館のニュースやインターネットを利用しよう。

『国語 六年（上）創造』（光村図書）

☆受け手のクリティカル思考

p.24「『聞く』ということ」：「聞こうとする態度」「上手な質問をしよう」「自分で考えながら聞く」の解説。

「自分で考えながら聞く 相手の話を、心を開いてしっかり聞くと、相手の話をうのみにするというのはちがう。「うのみ」とは、「う」という鳥が魚をそのまま飲み込むことからできた言葉で、つまり、自分でよく考えない聞き方である。聞いたことを分かってほしいことが、「聞き上手」にならないのと同じように、聞いたことをなんでも信じこむことも、「聞き上手」ということにはならない。自分で考えながら「聞く」ことが必要だからである。(p.25)

★他メディア（新聞、テレビ）／☆送り手のメディアリテラシー（プレゼンテーション）

p.26「こんなこと、したいな」：新聞記事・テレビ・本・パンフレットなどを見て、得られた情報を例にして一分間スピーチをしよう。

★他メディア（ファクシミリ、電子メール）／☆送り手のメディアリテラシー（メディア選択）

Pp.28-31「問い合わせの手紙」：手紙の代わりにファクシミリや電子メールという手段がある。問い合わせ時に利用するメディアをいろいろ選択しよう。

p.30「また、急ぎの用件のときは、ファクシミリ（ファックス）や電子メールも使われます。」

★他メディア（新聞）／☆受け手と送り手のクリティカル思考

p.38「砂漠に挑む」：読んでわかったことについて、「砂漠 PR 新聞」を作ろう。

p.38「筆者の考えと事実を読み取ろう 不毛と思われていた砂漠に、筆者はどんな考えで挑んだのだろう。筆者の考え方や読者への呼びかけに対して、自分の考えを持ちながら読もう。」。

p.47「書いてみよう：『砂漠に挑む』で知ったことをもとに、『砂漠 PR 新聞』を作ろう。その中に、砂漠の利用について自分の考えをまとめた文章を入れよう。」として、書き方のガイドラインあり。

★他メディア（インターネット、コンピュータ、ビデオ）／☆送り手と受け手のメディアリテラシー（プレゼンテーション）

Pp.52-59「ガイドブックを作ろう」：資料収集にインターネットのホームページを見よう（p.54）。作成したガイドブックについて、ホームページに紹介を載せること等によって、作成したガイドブックを紹介しよう（p.59）。「分かりやすく、効果的に書くには」として、＜図や写真を活用する。＞など5つのポイントの列挙あり（p.59）。

「効果を考えて書こう 自分がおとずれた場所や、自分が住んでいる町について、知らない人に、その様子やよいところをしょうかいしよう。読んだ人が行ってみたい気持ちになり、実際に行ったときに役に立つように、書き方・まとめ方を工夫しよう。1 どんなガイドブックにするか考えよう。2 材料を集めて構想を練ろう。コンピュータやビデオなどを使って、映像や音声による説明も取り入れているところを、まとめてしょうかいしよう。」(p.55)

★他メディア（音声テープ）／☆送り手のメディアリテラシー（プレゼンテーション）

Pp.97-99『『作家と作品』展示コーナーを作ろう』：関心のある作家についての展示コーナーを作ろう。音声テープを利用しよう。

『あたらしいこくご 一上』（東京書籍）

☆受け手のクリティカル思考

Pp.50-55「なになかな なになかな」：かば、はりもぐら、ぞうについて、写真の一部分だけ

を見せ、「なぜなぜ」クイズによってその写真の全体像を推測させる。次ページ以降に、全体像が写った写真を出す（解答）。

『新しい国語 二上』（東京書籍）

☆送り手と受け手のクリティカル思考

Pp.21-22「たからものを しょうかいしよう」：「わたしの大切にしているたからもの」をあてるクイズをしよう。言葉でヒントを出そう。

★他メディア（テレビ）

p.65「楽しい おもちゃを 見つけよう」：本やテレビ番組を見て、手作りおもちゃを探そう。

『新しい国語 三上』（東京書籍）

☆送り手のメディアリテラシー（プレゼンテーション）

Pp.60-67「しょうかいしよう、『お気に入りの場所』」：お気に入りの場所について、「しょうかいする場所を決めよう」「発表の練習をしよう」「発表会を開こう」という演習をしよう。取ざい計画ノート、発表の台本の例示あり。

★他メディア（ビデオレター、インターネット）

Pp.60-67「しょうかいしよう、『お気に入りの場所』」(p.66)、「ビデオレターにして、ほかの学校の友だちに見てもらう」「校内放送などでながす」「インターネットのホームページにのせる」ことの例示あり。

『新しい国語 四上』（東京書籍）

☆送り手のメディアリテラシー（プレゼンテーション）

Pp.22-29「知らせたい、あんなことこんなこと」：身の回りのことを話して新聞に書こう。「記事の書き方 読み手のことを考え、分かりやすく書く。中心になる記事には、リード（あらまし）をつけ、見出し、リード、本文のそれぞれで内ようが分かるようにする。」(p.28)
「見出しのつけ方 読み手の心をひきつけることばにする。新聞やざっしなどの見出しも参考にするとよい。見出しの文字は目立つように、大きく太くしたりかざりをつけたりする。」(p.29)

★他メディア（コンピューター）

Pp.58-59「図書館へ行こう」：読みたい本を探すとき、コンピューターでさがそう。

☆送り手のメディアリテラシー（プレゼンテーション）

Pp.60-67「教え合おう、『生活のくふう』」：『生活のくふう』について調べよう
「調べたことをメモにまとめよう」「発表の練習をしよう」「発表会を開こう」という演習を

しよう。

★他メディア (テレビ)

Pp. 60-67 「教え合おう、『生活のくふう』」：本で調べたり、テレビのじょうほう番組を見たりしよう (p. 61)、司会者とかい説者に分かれてテレビ番組風に発表しよう (p. 65)。

『新しい国語 五上』(東京書籍)

★他メディア (テレビ、新聞) / ☆受け手のクリティカル思考

Pp. 24-33 「伝え合おう、わたしの意見」：「ことになった意見を調べて 身の回りのことや、テレビや新聞などで見聞きしたことがらについて、自分がどのような意見や考えを持ったか思い起こしてみよう。そして、そのことがらについて、ことになった意見や考え方はないか、次のような方法で調べよう。」。

方法として、他の人に聞く、他の人の立場に立つ、テレビや新聞を利用するを例示。「自分とはことになった意見に対して、どう反ろんすればよいかを考えよう。また、自分の意見を受け入れてもらうには、どのように説得すればよいかを考えよう。」(Pp. 26-27)

★他メディア (テレビ)

Pp. 24-33 「伝え合おう、わたしの意見」：p. 24 「テレビや新聞などで知ったことについて、自分の意見をまとめて発表しよう。」

★他メディア (コンピューター)

Pp. 72-73 「図書館へ行こう」：十進分類法の解説の中で、コンピューターで検索すると本の分類番号がわかる (p. 73)

★他メディア (ラジオとテレビのニュース番組) / ☆送り手と受け手のメディアリテラシー (プレゼンテーション)

Pp. 74-83 「ニュースを伝え合おう」：p. 74 「ニュースを見て、取り上げられている内容や話し方のくふうを調べよう。身の回りのことをニュースにして、たがいに伝え合おう。」

Pp. 75-77 「ニュースについて調べよう」：話題をつかむ、情報を整理する、話し方などのくふうに着目する、という3点の解説。

Pp. 78-80 「ニュースを伝える練習をしよう」：ニュースをさがそう、取材をしよう、ニュース原こうにまとめよう、という3点を解説。

Pp. 79-80でニュース原こうを例示。Pp. 81-83では、「ニュースを伝えよう」として、発表会の解説。

『新しい国語 六上』(東京書籍)

★他メディア (インターネット、テレビ、新聞) / ☆送り手のメディアリテラシー (プレゼンテーション)

Pp. 24-33「しょうかいしょう、心をひかれた人物」：心をひかれた人物について調べてテレビや新聞での見聞などを思いだして「ミニ伝記」を書こう。図書館、地域の記念館、インターネットなどを利用しよう (p. 26)。

★他メディア（インターネット）／☆受け手のメディアリテラシー

Pp. 84-85「図書館へ行こう」：図書館、博物館、資料館、記念館、インターネットを利用しよう。

★他メディア（ニュース番組、ビデオ）／☆受け手と送り手のメディアリテラシー（テレビのニュース番組）

Pp. 86-95「ニュース番組を作ろう」：「ニュース番組を見て、どのような構成になっているか調べよう。自分たちで、学校版のニュース番組を作って発表しよう。」。

Pp. 87-89「1 ニュース番組について調べよう」、Pp. 90-93「2 自分たちのニュース番組を作ろう」、Pp. 94-95「3 ニュース番組発表会を開こう」。中けい、インタビュー、実演コーナー、フリップ、司会、アシスタント、アナウンサー、キャスター、レポーターという語の解説。ビデオにとって見よう。

『みんなとまなぶ しょうがっこうこくご 一ねん上』(学校図書)

☆受け手のクリティカル思考

Pp. 56-63「いきもののあし」(しゃしんで たしかめながら よみましょう)：かえる、らいおん、だちょうについて、一部分(あし)の写真を見せ、「これは、なんのあしでしょう。」と、全体像を推測させる。次ページ以降で全体の写真を出し、種明かしをする。

『みんなと学ぶ 小学校 こくご 二年上』(学校図書)

該当個所なし

『みんなと学ぶ 小学校国語 三年上』(学校図書)

★他メディア（壁新聞）

Pp. 74-79「見てきたことをまとめよう」：地いきにある施設や有名な場所をたんけんして、わかったことを、グループ新聞にまとめ、壁に貼ろう。

☆送り手のメディアリテラシー（プレゼンテーション）

Pp. 74-79「見てきたことをまとめよう」

「1 じゅんぴをしよう」(p. 75)、「2 たんけんに出かけよう」(p. 76)、「グループ新聞を作ろう」(Pp. 77-78)、「4 でき上がった新聞を発表しよう」(p. 79)、割付や学区新聞の例示あり。

『みんなと学ぶ 小学校国語 四年上』(学校図書)

☆受け手と送り手のメディアリテラシー (取材、プレゼンテーション)

Pp.26-33「わたしはレポーター」：地いきの有名な場所等を取材し、発表し、招待状を書き、発表会をしよう。「1 話し合って題材を決めよう」(Pp.26-27)、「2 取材のじゅんびをしよう」(Pp.27-28)、「3 取材をしよう」(Pp.28-29)、「4 発表の組み立てを考えよう」(p.29)、「6 発表会をしよう」(Pp.31-32)。

★他メディア (ビデオ、テープ、かべ新聞) / ☆倫理性 (取材の時)

p.28「わたしはレポーター」：取材のとき、「写真やビデオ、テープにとるときには、相手のきょかを得る。」と例示されている。

p.30「わたしはレポーター」：「言いたいことをうまく伝えることができるように、ビデオやテープを使って、(以下略)」

p.32「わたしはレポーター」：発表の様子をビデオにとって校内で放送してもらったり、まとめたことをかべ新聞でけいじしたり (以下略)」

『みんなと学ぶ 小学校国語 五年上』(学校図書)

★他メディア (学校の放送室)

☆送り手のメディアリテラシー (プレゼンテーション)

表紙グラビア：学校の放送室での音声放送のようす。

Pp.44-49「経験をふり返ろう」：心が生き生きと動いたことを整理して、種カードに書く。いつ、内容、気持ちを書く種カードの例示。Pp.46-49に「初めての委員会活動」という作文の例示。[学校放送の挿し絵あり。]

★他メディア (コンピュータ、インターネット) / ☆受け手のメディアリテラシー (取材)

Pp.64-66「いろいろな方法で調べよう」：「日本の恐竜時代」を読んで、ぎ問に思ったことや、もっと知りたいと思ったことをいろいろな方法で調べよう。図書館、博物館、資料館、インターネットなどを使って調べよう。

『みんなと学ぶ 小学校国語 六年上』(学校図書)

★他メディア (コンピュータ、インターネット)

Pp.62-63「いろいろな方法を使って調べよう」：本や図かん、博物館や資料館など、コンピュータ (インターネット) を使って検さくするなど、調べたいことをいろいろな方法で調べましょう。裏表紙折り込みも見ること (コンピュータ検索の挿し絵あり。)

☆送り手のクリティカル思考 / ☆送り手のメディアリテラシー (プレゼンテーション)

Pp.100-107「言葉のおもしろさ大研究」(知ろう・伝えよう)：「仮説を立てながら調べ、レポートにまとめて発信する。」(p.100)、「1 テーマを見つける、2 考えて、仮説を立てる、

3 調べて、仮説を検証する、4 レポートにまとめる。」

『わたしたちの しょうがくこくご 1 上』(日本書籍)

該当個所なし

『わたしたちの 小学国語 2 上』(日本書籍)

該当個所なし

『わたしたちの 小学国語 3 上』(日本書籍)

該当個所なし

『わたしたちの 小学国語 4 上』(日本書籍)

該当個所なし

『わたしたちの 小学 国語 5 上』(日本書籍)

☆送り手と受け手のメディアリテラシー／☆クリティカル思考

Pp. 20－21 「あれじゃ、かわいそう」(クリちゃん)：マリちゃんと飼い犬ラブがひもを引っ張り合いし、それを見たクリちゃんたち 2 名が助けにいく 4 コマ漫画。どちらを助けるのか 2 名の意見が食い違っていた。「想像や思いこみだけで話していると、まちがうことがあります。(中略)。話をしているときは、相手が、自分の言うことをわかってくれているものと考えてしまいがちです。(中略)。自分が言おうとしていることが、相手にわかってもらえているか、注意しながら話しましょう。」

☆送り手のメディアリテラシー (プレゼンテーション)

Pp. 70－73 「わたしのドキュメンタリー」：文章と絵や写真によるドキュメンタリーを作ってみましょう。発表会をして、どんなところがよかったか感想を交流しましょう。テーマ、事実の集め方、組み立て方、作品の例示あり。[挿し絵に VTR カメラによる取材風景あり]

☆送り手と受け手のメディアリテラシー

Pp. 114－115 「いろいろな資料を見せながら」(話してみよう)：新聞やテレビの報道で興味をもったことについて調べ、資料を見せながら、スピーチをする。「効果的に資料を使ったスピーチをくふうしてみましょう。」

『わたしたちの 小学国語 6 上』(日本書籍)

該当個所なし

『ひろがることば しょうがくこくご 1上』(教育出版)

☆受け手のクリティカル思考

Pp.38-45「かくれて いるのは なに」：ばらの木の全体写真をみせ、そこに紛れ込んでいる尺取り虫を探させる。次ページには尺取り虫の箇所を拡大した写真がある (Pp.38-39)。次は逆に、このはちょうの全体写真をみせ、次ページで木に紛れ込んだこのはちょうの写真を掲載 (Pp.42-43)。ほか、例示として、紛れ込んだ全体写真のせみなど4枚 (p.43)。

『ひろがることば 小学国語 2上』(教育出版)

☆送り手のメディアリテラシー (フィールド調査、プレゼンテーション)

Pp.32-37「たんけんした ことを」：学校のまわりをたんけんしてしらべたことを作文に書き、しょうかいする。「しらべたい ことを 話し合う」(Pp.32-33)、『はっけんカード』を 書く」(Pp.33-34)、「カードを もとに 作文を 書く」(Pp.34-37)、「書いた作文を しょうかいする」(p.37)。

『ひろがる言葉 小学国語 3上』(教育出版)

☆送り手のメディアリテラシー (実験観察) / ★他メディア (ミニ新聞)

Pp.30-35「かんさつしたことを」：横書き。たがめ、やごについて、「1 カードを作ってかんさつする」(p.35)、「ふしぎに思ったことを調べる」(p.34)、「かんさつノートや調べたことをもとにまとめる」(p.33)。まとめ方として、「こん虫新聞」などを例示 (p.33)。

★他メディア (ミニ新聞)

Pp.60-62「変身インタビュー」：パンダなどに変身した子に対して、インタビューし、わかったことをミニ新聞にまとめよう。

『ひろがる言葉 小学国語 4上』(教育出版)

★他メディア (放送、放送記者) / ☆送り手のメディアリテラシー (プレゼンテーション)

Pp.4-6「町に大きなかばが来た」：町に大きなかばがきたことを想定して、放送記者のように、「このできごとを、ニュース番組でほうこくするように話してみましょう。」(p.6)

★他メディア (学級新聞、コンピューター)

Pp.94-97「作ってみよう、学級新聞」：学級のようなすやできごとを、ほかの学級のみんなに新聞で伝えよう。新聞の例示あり。「図や絵、写真も入れたよ。コンピューターを使ってもいいね。」(p.95) とある。

『ひろがる言葉 小学国語 5上』(教育出版)

☆受け手と送り手のメディアリテラシー (インタビュー)

Pp.4ー6「インタビューに出かけよう」：校外へグループでインタビューに出かけ、発表しよう。

☆受け手と送り手のメディアリテラシー（インタビュー）

Pp.39ー49「自動車工場を見学して」(情報を生かす)：「(一)自分の調べたいことを見つける、(二)課題にそって見学メモを作る、(三)組み立て表をもとに見学記録文を書く、(四)書いた作文を読んでいただく。」テーマはテレビのニュースなども参考にする。

★他メディア（まんが）

Pp.58ー68「まんがの方法」：コマ、フキダシ、せりふ、人物の描き方、背景などの技法の説明。

★他メディア（インターネット）／☆受け手のメディアリテラシー（取材とプレゼンテーション）

Pp.68ー72「おもしろさのひみつをさがろう」：「1テーマを決まる、2資料を集める、3資料を整理する、4発表」資料の収集は、インタビュー、図書館、インターネット、博物館、資料館などで。

★他メディア（コンピューター、電子メール）／☆送り手のメディアリテラシー（プレゼンテーション）

Pp.96ー99「パンフレットで伝えよう」：コンピューターでも手紙を出せる。(p.98)

a.99にパンフレットの例示あり。上浦町のひらめのようなしょうくのことをはっきり伝えるくふうとして、「①自分が伝えたいことを見出しにする、②写真やグラフを取り入れる、③具体的な事実や数を入れる、④記事の順序をくふうする」を列挙。(p.97)

『ひろがる言葉 小学国語 6上』(教育出版)

☆送り手と受け手のクリティカル思考

Pp.4ー6「耳をかたむけよう」：「事実を的確に伝える、事実と自分の意見を区別する、調べたことについては伝聞の形で伝える。」

★他メディア（テレビ、新聞、ラジオ、ニュース番組、インターネット）／☆受け手と送り手のメディアリテラシー

Pp.38ー47「わたしたちを取りまく社会問題」(情報を生かす)：社会問題について、「一問題をとらえる、二情報を集めてまとめる、三報告会をする、四報告会での意見を参考にして、作文にまとめる、五書いた作文を活用する。」

★他メディア（コンピューター）

Pp.71ー74「新しい世界と出会おう」：コンピューターを使って本を調べたり (p.74)

『しょうがく こくご 1上』(大阪書籍)

該当個所なし

『小学国語 2上』(大阪書籍)

該当個所なし

『小学国語 3上』(大阪書籍)

☆送り手のメディアリテラシー (実験観察)

Pp. 70-78 「身のまわりの生き物から」(考え方や書き表し方を話し合おう) : 横書きページ。実験や観察などによる調べ方やその書き方。「図や表を使って書くこともできる。」「予想もしたらいいと思います。」(p. 72)。「アリの好きな食べ物」として、実験の進め方の例示あり (Pp. 70-71)。

『小学国語 4上』(大阪書籍)

☆送り手のメディアリテラシー (ニュース、プレゼンテーション)

Pp. 8-9 「ふしぎ発見-わたしのニュース-」: ちょうちょ、にじを例に、「毎日のできごとのなかから、学級みんなにぜひ知らせたいと思うことを、ニュースに書いて、みんなで読み合いましょう。」(p. 9)。こうもりについて、画用紙に書いた絵日記風の例示あり (p. 9)。

『小学国語 5上』(大阪書籍)

★他メディア (テレビ、新聞)

Pp. 104-115 「ものごとの二つの見方から」: 新聞のよさとテレビのよさに関するパネルディスカッションの形式と順序の例示。「手紙のよさと電話のよさ」などの話題を設定してパネルディスカッションをしよう。

☆受け手のクリティカル思考

Pp. 114-115 「情報を伝えるもの」: 「テレビや新聞によって、わたしたちは、直接見たり聞いたりしていないことについて知ることができます。このようにして伝えられるものを情報といいます。」「情報を受け取るわたしたちは、情報を伝えるものの特ちょうを考えておく必要があります。次のような方法で、情報の伝え方について調べてみましょう。」「同じことを、新聞とテレビがどのように伝えているかについて比べる。: あるニュースや野球の試合などのテレビ放送を録画しておき、翌日の新聞記事と比べてみましょう。テレビでしかわからないこと、新聞でしかわからないことは、それぞれどんなことでしょうか。」「同じ日の新聞を何種類か集め、紙面を比べる。: 新聞の一面には、いちばん大きなニュースがのせられます。しかし、どの新聞にも同じ記事がのるとは限りません。どのニュースがいちばん大事かは、それぞれの新聞社が独自に判断しているからです。同じニュースが一面にあれば、それがどのように取りあつかわれているかも比べてみましょう。」「新聞やテレビの情報を調べ

てみると、それらを制作する人々のとらえ方や考え方によって、情報のまとめ方や伝え方にいろいろなちがいが出てくることがわかります。わたしたちは、情報を受け取るときに、それがどのようにしてつくられたのかを考えるとともに、自分の意見をもつようにしたいものです。」

『小学国語 6上』(大阪書籍)

☆受け手のクリティカル思考

Pp. 38－39「推論によって説明しよう」：「こんな事実からすると、こうではないだろうか。」と考えて述べることを、「推論する」といいます (p. 38)。環境問題について、見つけた資料(『環境白書』)からの山本さんの推論の例示あり。

☆受け手のクリティカル思考

Pp. 68－69「見方を変えて考えよう」(広がる読書)：「異なる見方や考え方は、わたしたちの周りにいくらでもあります。異なる立場の人どうしが相手を理解し合い、尊重し合うことのたいせつさについて考えるために、本を読みましょう。」(p. 69)

★他メディア(コンピュータ、インターネット)／☆受け手と送り手のメディアリテラシー(情報収集、プレゼンテーション)

Pp. 104－107「コンピュータを活用しよう」：「調べたり考えたりしたいことがあるときに、コンピュータを活用すると、たいへん効果的です。」ホームページの具体的例示あり (p. 104)。「いろいろな情報を使って考えをまとめようとするときにも、コンピュータが役に立ちます。」「ワープロで文章を書く、表やグラフを作る、絵をかいたり写真を加工したりする。」(p. 106)。「自分たちで調べたり考えたりしたことを、コンピュータを使って、他の人に伝えることができます。電子メールでは、文字だけでなく、絵や音声なども送れます。ホームページを作ると、インターネットで多くの人に見てもらうことができます。みなさんも、学校や学級のホームページを作って情報を発信してみてもどうでしょうか。」(p. 107)

☆受け手のクリティカル思考／☆倫理性

Pp. 104－107「コンピュータを活用しよう」：「コンピュータを活用するために コンピューターを使うと、多くの情報を手に入れることができます。わたしたちは、そのなかからほんとうに必要なものや信頼できるものを選ぶ力を身につけたいものです。また、情報を発信するときには、事実と自分の考えが区別できているか、他の人を傷つける表現になっていないかなどに気をつけることが必要です。」(p. 107)

VI 総括

1 まとめ

調査2-1では、A社版の小学校教科書について内容分析をおこない、以下の3つの結論にいたった。(1) 一部を除いて、メディアそのものを強調したりテラシーを扱う単元や関連教材を峻別して抽出することは、ほとんど困難である。なお、一部とは、テレビのニュースキャスター(5年生)のような、音声と非言語的コミュニケーションを強調した教材を指す。(2) 送り手あるいは受け手のクリティカル思考を扱った教材がある。プリント紙では、1年生「だれだか わかるかな」など。他メディアでは、5年生「言葉の研究レポート」など。(3) 他メディアを扱っている教材がある。5年生「こんなこと、したいな」(ニュースキャスターになろう)など。これらから、小学校国語科教科書には、実質的にはメディアリテラシー関連教材がかなり含まれていると結論できる。

調査2-2では、1～6学年6社の教科書(A社版含む)について、(1)を意識しつつ、上記(2)と(3)の2点に留意しながら関連箇所の抽出作業をおこなった。得られた結果であるが、メディアリテラシーに関連して6社を相互に対比すると、必ずしも同じ学年で同じような単元が扱われているわけではなかった。また、扱われている教科書もあり、そうでない教科書もあった。いくつかを例示する。

調査2-2(1):メディアそのものを強調したりテラシーを扱う単元・関連教材に関しては、例えば、「問い合わせの手紙」(光村図書、6年)が、手紙の代わりにファクシミリや電子メールが使われることを解説している。「パンフレットで伝えよう」(教育出版、5年生)が、コンピューターでも手紙が出せるとしている。「ものごとの二つの見方から」(大阪書籍)が、新聞の良さと電話の良さに関するパネルディスカッションをおこなうように形式と手順を示している。

調査2-2(2):クリティカル思考では、「だれだか わかるかな」(光村図書、1年)、「なにかな なにかな」(東京書籍、1年)、「いきもののあし」(学校図書、1年)、「かくれて いるのは なに」(教育出版、1年)の中で、写真の一部分だけではその動物が何かわかりにくいということを、「なぞなぞ」ゲームの形式を使って取り扱っている。これは、情報の送り手が意図的にあるいは偶然に情報の一部分だけを提示すると、そのことによって情報の受け手がミスリードされることがあるということと大きく関わる。

クリティカル思考そのものを解説しているものもある。例えば、「たんぼぼのちえ」(光村図書、2年)、『『聞く』ということ』(光村図書、6年)である。類似の内容は、「伝え合おう、わたしの意見」(東京書籍、5年)、「あれじゃ、かわいそう」(日本書籍、5年)、「情報を伝えるもの」(大阪書籍、5年)にも見られる。

調査2-2(3):他メディアについては、すべての教科書で扱われている。新聞やテレビ(放送)に関するロールプレイについては、「こんなこと、したいな」(ニュースキャスターになろう)

(光村図書、5年)、「ニュースを伝え合おう」(東京書籍、5年)、「ニュース番組を作ろう」(東京書籍、6年)、「わたしはレポーター」(学校図書、4年)、「わたしのドキュメンタリー」(日本書籍、5年)、「町に大きなかばがきた」(教育出版、4年)、「コンピュータを活用しよう」(大阪書籍、6年)など、かなり扱われている。それらの多くは、インタビュー、取材、あるいは情報検索の手段・道具として解説されている。また、情報発信の源として、新聞とテレビ(あるいは放送局)が詳しく取り扱われている。インターネットの用語を説明したものもある(光村図書、5年)。

以上をまとめると、調査2-2から得られた結論は、調査2-1を少し修正したものとなる。すなわち、(1)メディアそのものを強調したリテラシーを扱う単元・関連教材に関して、「問い合わせの手紙」(光村図書、6年)、「パンフレットで伝えよう」(教育出版、5年生)、「ものごとの二つの見方から」(大阪書籍)などが見出される。ただし、かなりの部分は文字メディアを前提にしている点で、多様なメディアそのものの特性を強調したトーンにはなっていない。(2)クリティカル思考は、「だれだか わかるかな」(光村図書、1年)、「なになに なになに」(東京書籍、1年)、「いきもののあし」(学校図書、1年)、「かくれて いるのは なに」(教育出版、1年)などで見出される。クリティカル思考そのものも、「たんぼぼのちえ」(光村図書、2年)、「『聞く』ということ」(光村図書、6年)などで見出される。(3)他メディアについては、すべての教科書で多く扱われている。以上より、小学校国語科教科書には、実質的に多くメディアリテラシー関連箇所・関連教材が扱われていると結論できる。

2 今後に残された課題

ここで内容分析をおこなったのは小学校国語科教科書上巻である。下巻についての分析は残されたままである。したがって、引き続き、教科書(下)についても調べて、同様の傾向が見られるかどうかを確認することが今後の課題となる。また、ここで見出されたメディアリテラシー関連箇所あるいは関連教材について、それらが具体的に授業実践の対象とされたのかどうか、それはどのような扱いであったか、実態調査をおこなうことも必要と思われる。

<付記1> この小論は、福井大学大学院教育学研究科の科目「教育実践研究」(2002年度前期)の大野木の授業用資料、福井市立東安居小学校校内研修会(2002年5月13日)および福井県教育工学研究会月例会(2002年7月6日、福井大学)での大野木の発表の一部を加筆・修正したものである。

<付記2> 本稿は国語科教育の中にメディアリテラシー育成の問題を位置づけようとしているのではなく、むしろ、メディアリテラシー育成の源が小学校国語科の「中にも」見出されるかどうかを実証しようとしたものである。それは、筆者が国語科教育ではなく心理学を専門としていることによる。

引用文献

- カナダ・オンタリオ州教育省 (編)(1989) / FCT (市民のメディア・フォーラムの会 (訳))(1992)『メディア・リテラシー：マスメディアを読み解く』リベルタ出版
- 市川克美 (1999)『これが“21世紀の学力”だ!』明治図書出版
- 井上尚美・中村敦雄 (編)(2001)『メディア・リテラシーを育てる国語の授業』明治図書出版
- 乾昭治 (監) 田代光一・宇野秀夫・村野井均・大野木裕明 (編) 福井県教育工学研究会 (著)(2002)『学校で拓くメディアリテラシー』日本文教出版
- 河野庸介 (2000)『中学校新国語科授業の基本用語辞典』明治図書出版
- 河野庸介・金子守 (1999)『改訂中学校学習指導要領の展開 国語科編』明治図書出版
- 小森茂 (編)(2001)『小学校新国語科授業の基本用語辞典』明治図書出版
- 小森茂・井上一郎 (編)(2002)『小学校国語科 基礎基本と学習指導要領の実際』東洋館出版社
- 水越伸 (1998) メディア論から 『AERA Mook 情報学がわかる』朝日新聞社 52-53.
- 文部省 (1999)『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
- 村野井均・三嶋博之・乾昭治・大野木裕明 (編)(1999)『学校と地域で育てるメディアリテラシー』ナカニシヤ出版
- 文部省 (1998)『小学校学習指導要領』大蔵省印刷局
- 坂元昂 (1986) メディアリテラシー 後藤和彦・坂元昂・高桑康雄・平沢茂 (編)『メディア教育を拓くーメディア教育のすすめ①ー』ぎょうせい
- 菅谷明子 (2000)『メディア・リテラシーー世界の現場からー』岩波書店 (新書)
- 鈴木みどり (編)(1997)『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』世界思想社
- 鈴木みどり (編)(2001)『メディア・リテラシーの現在と未来』世界思想社
- 高桑康雄 (1999) 新しいリテラシー 白鳥元雄・高桑康雄 (編)『新訂 メディアと教育』放送大学教育振興会 Pp. 205-220
- トロント市教育委員会 (編)(1998) 吉田孝 (訳)(1998)『メディア・リテラシー授業入門ー情報を読み解き自ら考える力をつける』学事出版
- 吉田貞介 (編)(1985)『映像時代の教育』日本放送教育協会
- 由井はるみ (編)(2002)『国語科でできるメディアリテラシー学習』明治図書出版
- 渡辺武達 (1997)『メディア・リテラシー』ダイヤモンド社
- 渡辺武達・山口功二 (編)(1999)『メディア用語を学ぶ人のために』世界思想社

教科書リスト (平成14年度版)

- 1) 光村図書：『こくご 一年(上) かざぐるま』『こくご 二年(上) たんぼぼ』『国語 三年(上) わかば』『国語 四年(上) かかやき』『国語 五年(上) 銀河』『国語 六年(上) 創造』
- 2) 東京書籍：『あたらしいこくご 一上』『新しい国語 二上』『新しい国語 三上』『新しい国語 四上』『新しい国語 五上』『新しい国語 六上』
- 3) 学校図書：『みんなとまなぶ しょうがっこうこくご 一ねん上』『みんなと学ぶ 小学校こくご 二年上』『みんなと学ぶ 小学校国語 三年上』『みんなと学ぶ 小学校国語 四年上』『みんなと学ぶ 小学校国語 五年上』『みんなと学ぶ 小学校国語 六年上』
- 4) 日本書籍：『わたしたちの しょうがっこうこくご 1上』『わたしたちの 小学国語 2上』『わたしたちの 小学国語 3上』『わたしたちの 小学国語 4上』『わたしたちの 小学 国語 5上』『わたしたちの 小学

国語 6上』

- 5) 教育出版：『ひろがることば しょうがくこくご 1上』『ひろがることば 小学国語 2上』『ひろがる言葉 小学国語 3上』『ひろがる言葉 小学国語 4上』『ひろがる言葉 小学国語 5上』『ひろがる言葉 小学国語 6上』
- 6) 大阪書籍：『しょうがく こくご 1上』『小学国語 2上』『小学国語 3上』『小学国語 4上』『小学国語 5上』『小学国語 6上』